

Title	國際紛争史考(板倉卓造著, 中央公論社發行)
Sub Title	
Author	前原, 光雄(Maehara, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.174(356)- 175(357)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0174">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0174</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

規律、死を恐れぬ氣風を失はず、陸海軍のよく統制され、堅忍不拔の勇氣を示した」といひ、また戦後の獲得については、「完全な勝利を得ながら日本人はその勝利に於て謙讓だつた」と述べ、日本の獲得が不釣合に少なかつたことを言つてゐる。更に注意すべきは、「この悼ましい戦争はロシアとヨーロッパの値打を下げた」と斷じ、三億のヨーロッパ人と六億のアジヤ人とは何等共通の記憶も希望も持たない明らかなる對立であると述べてアジヤ民族を警戒してゐる點である。

以上は本書の特色についてその一斑を述べたに過ぎないが、平和主義や國際主義を強調する本書は同じく間崎教授の譯筆に成るヴォルフ氏の民族文化史が軍國主義、國家主義を幟標とするのと好個の對照をなしてゐる。同教授が西洋史の文獻中、かくの如く特色あるものを選んで譯出せられたのは、勿論我が國の歴史教育に資せんが爲であつて、本書の如き良書を熟讀玩味することによつて初めて歴史事實の生きた解釋法を學ぶことが出来る。譯文についてはそれが詩的な流麗さと學術的な正確さとを兼備した最も勝れたものであること、改めて呶々するを要しない。卷末には上下二巻を通じての和洋兩様の總索引が附せられ、上巻にこれを缺いた不便が除かれてゐる。斯かる良書の公にせられたことを慶とし、譯者の勞に敬意を表し、弘く世の研究者、教育者、讀書家に一讀を薦むる次第である。(東京刀江書院發行、定價上製三圓、學生版二圓五十錢)(有賀春雄)

### 國際紛爭史考 (板倉卓造著) 中央公論社發行

他人の著述を正しく批評し得る爲には評者は著者と同等或は、以上の學力・識見を持つことが必要條件である。今私の場合には、この二つの中の何れの條件をも備へてゐない。従つて、私は全く評者としての資格者であるから、たゞ恩師の著述を紹介し、讀後感といふ様な私自身の感想を述べさせて頂くことにする。

本書には十六件の國際紛爭事件が敘述されてゐる。日露戰爭關係の紛爭事件三件、世界大戰關係のもの四件、外交上の慣例に關する事件六件、其他三件である。

先づ本書の第一の特色は記述の平明、行文の流麗なることである。元來法律關係の著述には、文章がぎごちないので讀者をうんざりさしてしまふ物が非常に多い。この結果、法律書は固いだけで無味乾燥のものであるといふ一般的な考へ方を社會の人々に植ゑ付けてしまつた。然し、本書は全くこれに反し、著者がその序文中に述べられてゐる様に、「寝轉んで讀」み得る柔かさを持つてゐる。この點は先づ讀者に、小説を讀む様な長閑な心安さを以て接することを得せしめる。

第二は材料の選擇が當を得てゐることである。國際紛爭事件の中には、法律的觀點からすれば興味はあるが、一般讀者には更に面白くないものが多い。専門家以外の人々の興味を惹く爲には、事件の内容が相當の變化を持ち、讀者の好奇心を湧かしめるものでなければならぬ。本書に收録せられた事件は何れもこの條件を

充すに足つてゐる。殊に、「敗殘の獨艦ドレスデンの行方」の如きは、探偵小説の如き興味を唆つて一氣に讀了せねば已まないであらう。

第三には、國際法的見地からして價值ある勞作たることである。その二三を摘録すれば、「商船を軍艦に變裝する問題」、「潜水艦の交戦方法」、「外交使節の地位」等に關して、學說の岐れてゐる點に關して、實證的研究に役立つべき材料が提供せられてゐる。

以上の三點を綜合するならば、大體に於て本書の記述と内容の如何なるものであるかは了解せられることと思ふ。國際法研究者が本書より受ける印象と、その他の人々の受ける印象とは元より同一ではあり得ない。然し、興味と法律的研究との兩者を共に備へてゐることは既述の通りであつて、一般讀者は小説以上の眞實味と満足を得、法律研究者は更にこれに加ふるに、法律學上の教示を受けることであらう。元來、日本にはこの種の著述が餘りに少な過ぎる。純法律的な所謂「國際法先例集」とでも稱すべき著述が外國には何れも相當ある。それ等と本書とは著者の記述的な態度に於て、即ち前者は純國際法的立場のものであり、本書は、これに讀者の興味を尊重する點を多分に含んでゐる點に於て相違はあるが、その價値に於て、前者が専ら國際法研究者の研究上の利益に役立つに反し、本書の如きは、一般大衆をして、國際問題に關する一般的な概念を與へ、啓發する點に於て、社會を指導し裨益すること極めて大であると言はねばならない(定價二圓)。

(前原光雄)

書評

## 臺灣高砂族系統所屬の研究

(臺北帝國大學土俗・人種學研究室編)  
刀江書院發行

臺北帝大の移川子之藏教授以下宮本延人、馬淵東一の諸君が、峻險極まりなき臺灣の蕃界に瘴癘の氣を犯し、剽悍な蕃人の間に伍して四年間の精勵倦む所なき調査によつて完成した高砂族系譜の研究は、菊倍判本篇五六二頁、資料篇一三一頁の大著となつて公刊された。吾々は此の長年月の間調査者達が如何なる苦心、如何なる犠牲を拂つて本書の編纂に努力されたかを知つてをるため本篇の發刊を迎へて衷心より悦びの念を禁じ得ない。移川氏は序文中に宮本馬淵氏等が病氣になやみながら惡戰苦闘せられたことを記し、かつ御自身が出發を一日延期せられたため幸ひ霧社事件の慘害を免かれたことを記されてをるが、吾々は、氏が此の四年の年月中に最愛の御令閨を失はれたる事實を憶ひ起し、本書公刊に當りて教授の御胸臆に感慨無量なるものがあることを推察し、感激に堪えぬ。氏等の苦心は完全に酬はれて、今回完成された本書は實に伊能氏・鳥居氏・佐山氏等の研究により遅々たる歩みを續けてゐた臺灣原住民の土俗學的調査に長大な飛躍を齎し本邦のエスノロジイの歴史上に新紀元を生んだ大出版と云ふべきものである。由來本邦の大學又は研究所に於て最近圖版の多い尨大な刊行物が考古學的方面に陸續として出版せられるが之に反し本邦の土俗人種學方面はまことに淋しく對岸のアメリカにスミソニア・インスチテュートの尨大な大出版を見るにつけ慚愧たるものが

(三七)

一七五